HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	マタイによる福音書四章四節についての一考察
Author(s)	田中, 勇二
Citation	基督教学, 27, 23-26
Issue Date	1992-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46514
Type	journal article
File Information	27_23-26.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究発表要旨

マタイによる福音書
四章四節についての一考察

田中勇二

序

埼玉大学教授で、無教会の関根正雄氏の集会で基督教信仰を学んだ量義治氏は、一九八八年に『無教会の論理』を、翌年の一九八九年には『無教会の展開』という書物を上梓した。「無教会とは何か」という同一の問いの下に、前者では無教会成立の論理が探究され、後者では無教会の歴史的発展の考察がなされたと言えよう。すなわち、体系的考察と歴史的考察の両者相俟って無教会の本質が問われているわけである。筆者は量氏の論考から種々の事柄を教わったのであるが、小論においてはその中から無教会二代目の一人である塚本虎二氏の聖書翻訳の問題を取り出し、その考察を行なう。

一、マタイによる福音書四章四節について

一、私訳ならびに各国語訳

マタイ四・四の希文和訳そのものは極めて簡単であり、本文批評学的にも大きな問題はない。私訳をすれば以下の如くになる。

そこでイエスは答えて言った。「『人はパンのみによって生きるのではなく、神の口から出るすべての言葉によって生きる』と書いてある。」

現代の若干の代表的翻訳である新共同訳、Neue Jerusalemer Bibel、REB、TOBの訳文を検討しても、マタイ四・四の翻訳の質は、訳者の個性に依存するところが少ない、ということが判明する。

二、マタイによる福音書四章一―一一節のコンテキストにおける四節

マタイはマルコ一・一二―一三を活用しつつ、Qを主たる資料として、我々のペリコーペを構成している。編集的付加とみなされるものは微少である。

一―二節は、物語の導入を成す。三―一〇節は三層構造を持っており、各層に悪魔の誘惑とイエスの申命記引用に基づく論駁が並置されている。誘惑は徐々に大きくなる。いわゆるクレッシェンド構造が認められるのである。すなわち、イエスは荒野から神殿に行き、最後には高い山で全世界の支配権にかかわる誘惑を受け、悪魔崇拝を要求される。

四節は、パンの問題にかかわる第一の誘惑に対するイエスの論駁であり、マタイは申命記八・三からの引用をアレキサンドリア写本に従って拡大している編集的付加の部分である。

マタイによる福音書では、イエスは申命記において叙述されているような、神の戒めを遵守するか否かを試みられ、神の子のように教育されるべきイスラエルの民とは異なり、誘惑に耐える者として描かれている。かくして、イエスは神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる従順なる神の子としての姿を呈する。

二、マタイによる福音書四章四節の塚本訳

塚本虎二氏は、岩波文庫の『福音書』においてマタイ四・四を以下の如く訳した。

しかし答えられた、「〝パンがなくとも人は生きられる。もしなければ、神はそのお口から出る言葉のひとつびとつでパンを造って、人を生かしてくださる〟と聖書に書いてある。」

三、誤訳論争

藤田若雄氏が編著者となり、『内村鑑三を継承した人々』という上下の二巻より成る書物が一九七七年に出版された。大河原礼三氏は、塚本氏の信仰を上巻では仮現論、下巻では政教分離の神学、母性的宗教であると批判している。量義治氏は『無教会の展開』の中で、大河原氏の立論に対するアポロギアを記し、塚本氏の信仰を擁護する論陣を張っている。

筆者は、塚本氏の信仰的立場全体に対して如何なる評価を下すか、という日本キリスト教史ないし日本近代思想史上の問題について、概ね量義治氏に賛意を表明するものであるが、未だ断定的な意見を開陳する段階には達していない。

さて、大きな問題はさておいて、塚本氏のマタイ四・

四の翻訳をめぐっての誤訳論争に触れる。

大河原氏は、塚本訳を誤解されやすい訳であると批判し、塚本訳成立の根拠を塚本氏のイエス観に由来する、と言う。すなわち、大河原氏によれば、塚本氏はイエスの肉体性・社会性を軽視し、「霊の王国」に生きるイエスに重点を置いているが故に、「パンがなくとも人は生きられる」という訳をする、ということになる。それに対して量氏は、塚本氏を霊肉二元論でもなく、唯霊論者、唯肉論者でもなく、霊肉一元論者であると捉え、塚本氏においては一切の生活問題が信仰問題として把捉されている、と言う。

この誤訳論争を踏まえ筆者が考えるところは、塚本氏自身が如何なる信仰的立場に立脚するにせよ、それはマタイ四・四の翻訳とは無関係である、ということである。マタイ四・四の翻訳は、訳語に多少の相違があるにせよ、私訳ないしその近似置においてその決着をみる。これを日本語では翻訳と言う。従って、塚本訳は誤訳である。

もっとも、塚本氏自身は自らの訳を「突飛」であると承知しており、霊肉一元論の立場から読者を「驚かしてやろうと思ってわざとこの思い切った訳を選んだ」のである。「躓く者は躓け」とされる。

しかし、塚本氏が主観的に何を考えようとも、誤訳は誤訳である。とはいえこの誤訳は無意味ではなく、有意義な誤訳である。何故なら、塚本氏はマタイの編集上の操作に合致したイエス像を提供しているからである。しかし、そのために塚本氏はテキストに対する介入をせざるを得なかった。事実、塚本氏は小さな活字を挿入して文意を読者に判らせるべく努めなければならなかったのである。これは、翻訳ではなく注解、ないし敷衍訳と銘打つ方が良いと思われる。

その他種々の角度からの塚本訳批判があるが、マタイ神学ないしキリスト教批判に重ねる形で塚本訳を批判しても、批判の対象を有効に捉えていないが故に説得力を欠く。塚本訳は希又和訳における誤訳をしているが故に、批判されるべきなのである。

まとめ

以上、マタイ四・四の塚本訳をめぐって、聖書翻訳の問題を考えた。聖書翻訳をする際には、たとえ内容的に

現代の読者に理解し難いところがあっても、可能な限り、語学的・文法的に正確な、歴史的・批判的・客観的な研究に基づいて作製された訳文を提供しなければならない。